黙想:待降節第3主日 (C年)

黙想のテーマ:「キリスト信者の喜びは、神との親密さから生まれる」「魂の喜びの実り」「洗礼者ヨハネのような神の恵みの先駆者」

キリスト信者の喜びは、神との親密 さから生まれる

魂の喜びの実り

洗礼者ョハネのような神の恵みの先 駆者

「エルサレムよ、喜びなさい。あな たの救い主が来られる | ෩。今日、 教会は主のご降誕の喜びを待ち望む 中で、聖パウロの勧めを繰り返し示 します。「主において常に喜びなさ い。重ねて言います。喜びなさい。 主はすぐ近くにおられます」(フィ リピ4・4-5)。この言葉はフィリピ の教会に宛てられたもので、ガウ デーテの日曜日として知られてい る、待降節第3日曜日の典礼を要約 しています。この「ガウデーテ(喜 びなさい)」という言葉が、典礼の 冒頭を飾るので、この日を「ガウ デーテの主日 | と呼びます。今日の ミサの神のみ言葉や固有の祈りの文 には、救い主が近づいておられるこ とへの喜びが満ちあふれています。 ミサの集会祈願では、喜びの心を与 えてくださるように神にお願いしま す。この日の祭服等の色は、可能で あればバラ色が用いられます。

フィリピのキリスト教共同体の深い 忠誠心は、聖パウロに大きな喜びを もたらしました。聖パウロは彼ら に、希望に満ちた愛情あふれる言葉 を送りました。このことは特に称賛 されるべきことです。なぜなら、聖 パウロが彼らに手紙を書いたのは、 キリストへの愛のゆえに捕らえら れ、鎖につながれた牢獄の中から だったからです。「主は近くにおら れます | (フィリピ 4・5) という言 葉を送って、聖パウロは彼らを励ま しました。確かに、私たちが生きて いる日常には、ときに困難や痛みが 伴います。しかし、それらは真の喜 びを妨げる障害ではありません。愛 に満ちた主は、いつも私たちのそば にいてくださるのです。初期のキリ スト教徒たちは迫害の中で、キリス トへの信仰こそが希望の源であるこ とを学びました。「私たちと神を知 らない人々との違いはここにありま す」と聖チプリアヌスは言いまし た。「逆境において神を知らない

人々は不平を言い、不満を漏らします。しかし、逆境は私たちを徳や真の信仰から引き離すことはありません。むしろ、逆境によってそれらは強められるのです」[2]。

神のみ言葉が私たちを招く喜びは、 甘い楽観主義ではありません。それ は、深い基盤に根ざした、はるかに 堅固なものです。主が来られるのを 待ち望む間も、主は私たちのそばに おられ、愛をもってご自身の民を見 守ってくださっているという、確信 の上に築かれた喜びなのです。主 は、私たちが何を必要としているの かを、私たち以上によくご存じであ り、私たちを助ける準備を整えてお られます。そして、再び私たちにこ う言われます。「恐れるな」(イザ ヤ35·4)。

「わたしは主によって喜び楽しみ、 わたしの魂はわたしの神にあって喜 び躍る。主は救いの衣をわたしに着 せ、恵みの晴れ着をまとわせてくだ さる | (イザヤ61・10)。今日のミ サの第一朗読において、預言者イザ ヤは、信仰を持つ者の真の喜びは、 神による恵みから生じるものである と説き示しています。内なる喜びの 源は、自分で何かを成し遂げたとい う達成感だけにあるとは限りませ ん。もちろん、そのような経験も喜 びをもたらします。しかし、それ以 上に深いところで、「喜びは神の子 としての自覚、すなわち、常に赦し てくださり受け入れてくださる、父 なる神に深く愛されているという確 信から生まれるのですしょ。このよ うに、私たちは主を信頼しているの で、私たちの心には希望が生まれ、 その希望が私たちの道を照らしてく れます。救い主はまもなく来られ、 決して私たちを見放すことはありま せん。

「大地が草の芽を萌えいでさせ、園 が蒔かれた種を芽生えさせるよう に、主なる神はすべての民の前で、 恵みと栄誉を芽生えさせてくださ る」 (イザヤ61・11)。 喜びは、神 の愛によって豊かにされた生き方か ら生まれます。それは、健全な自己 忘却をもたらし、主と兄弟姉妹への 純粋な献身を促します。このすべて が、私たちの心に深い平安をもたら し、生活にその跡を残すのです。聖 ホセマリアは私たちを励ましまし た。「子どもたちよ、幸せでありな さい。私の生活には不完全で足りな いものがたくさんあります。それを 考えれば、本来は幸せであるべきで はないのかもしれません。それでも 私は幸せです。なぜなら、神が再び 私たちを探し求め、今もなお父とし て愛してくださっていることがわか るからです。私たちは自分の生活か ら根こそぎ取り除くべきものを見つ け、それを決然と取り除き、焼き捨 てるべきものを見つけ、それを焼き

捨て、手放すべきものを見つけ、それを手放すのです」[4]。

聖霊が私たちの心に宿り、その働き かけによって、私たちは日々、言葉 にできないほどの喜びを味わうこと ができるでしょう。「神は決して私 たちをお見捨てになりませんから、 神のすぐ傍にいるなら、幾多の困難 も消え去ることでしょう。ご自分の 弟子、病人、足の悪い人に向けられ た愛が、異なった仕方で再び示され ます。イエスはお尋ねになります、 『どうしたのか』と。『実は…』と 答えはじめるやいなや、光が与えら れるか、あるいは少なくとも、現状 を受け入れることができ、平和を取 り戻すのですしい。

「神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。彼は証しをするために来た。光について証

しをするため、また、すべての人が 彼によって信じるようになるためで ある」(ヨハネ1・6-7)。ヨハネは 荒れ野に退き、ヨルダン川のほとり で説教を行いました。彼の言葉と生 き方は人々に深い感銘を与え、つい には、彼が、待ち望まれていたメシ アではないかと問う声が上がるほど でした(ルカ3・15-17参照)。しか し、ヨハネはそれを否定し、自分の 使命を明らかにしました。彼は、 「わたしは荒野で叫ぶ声である、 『主の道を整え、その道筋をまっす ぐにせよ』 (イザヤ40・3) | と預言

『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ』(イザヤ40·3)」と預言者イザヤの言葉を用いて語りました。ヨハネの言葉と彼の新たな生き方は、救い主の到来が間近であることを示す輝かしい印でした。

「わたしたちは問います。神のために完全に捧げられ、イエスへの道を 準備したこの生涯と、その強靭で正 しく一貫した内面性は、どこから来 るのでしょうか。答えは簡単です。

それは、神との関係、すなわち祈り からもたらされました。祈りこそが 聖ヨハネの全生涯を導く糸だったか らですして。洗礼者ヨハネのメッセー ジに耳を傾けると、私たちもまた、 福音によって豊かにされた生き方を 通して、主の到来が近いことを伝え られることに気づきます。このよう にして、私たちは家族や職場など、 周囲の人々に向けてイエスを告げ知 らせる声となるのです。私たちも、 洗礼者ヨハネのように、神の恵みの 先駆者としての役割を果たせるとい うことです。

聖母は「私たちの喜びの源(causa nostrae laetitiae)」であり、常に私たちに喜びをもたらしてくださいます。私たちの周りの人々のために主の道を準備できるように聖母にお願いします。「私たちは喜びをもって果たすべき奉仕のために、世界を光で満たさなければなりません。神の業において神の子がいるところに

は、内なる平和から生まれるユーモアや明るさが欠けることがないようにしなければなりません。内なる平和と自己を捧げること、他者への奉仕に自らを捧げることは非常に効果的で、神はその行いに謙虚さとともに霊的な喜びで報いてくださるのです」[7]。

- [1] 待降節第3主日 聖務日課 (Liturgy of the Hours, Vespers of Sunday III of Advent, ant. I.)。
- [2] 聖チプリアヌス、De mortalitate、13。
- [3] 聖ホセマリア、家族の集いでの メモ、1961年11月12日。
- [4] 聖ホセマリア、手紙、1931年3月 24日、62番。

[5] 聖ホセマリア『神の朋友』249 番。

[6] ベネディクト十六世、一般謁見 演説、2012年8月29日。

[7] 聖ホセマリア、手紙、1930年3月 24日、22番。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-taikou-3nichi-c/ (2025/12/13)